

KG244-H17



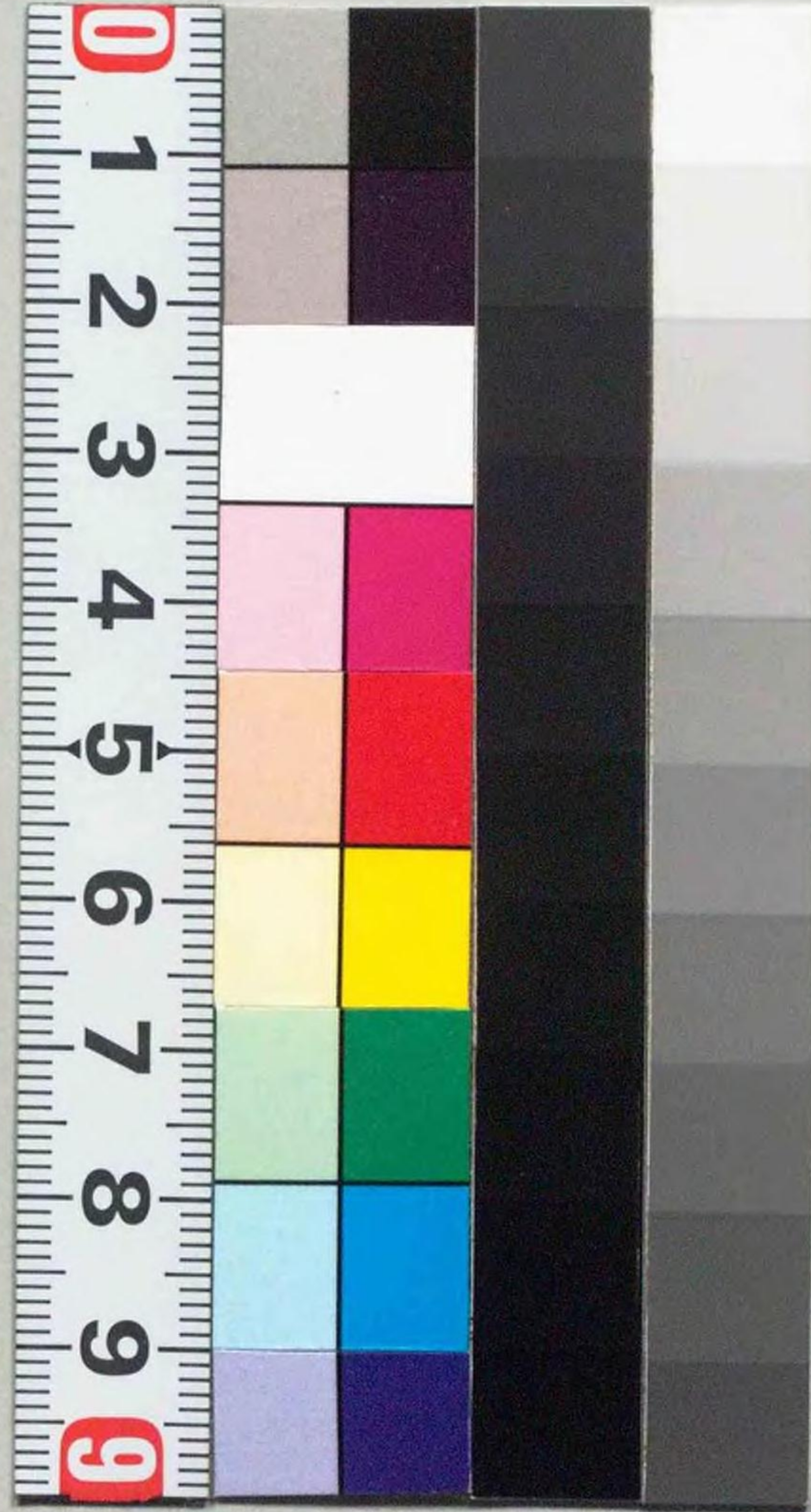
1200404181674

良寛禪師
自選歌集

ふるさと

吉野秀雄釋文

KG244-H17



KG244

H17



I 種

W



1200404181674

良寛禪師
自選歌集

ふるさと

吉野秀雄釋文

解 説

良寛禪師の自筆歌稿「ふるさと」は墨附十三葉の冊子にして、原本は安田靫彦氏の珍襲にかかり、複製は大正十一年七月七條憲三氏の金屬版印刷所より非賣品として刊行され、越後出雲崎なる禪師が生家橋屋の屋敷址に佐藤吉太郎氏等相謀りてかの良寛堂を建立せる際の記念品として配布せられたり。余夙にこれを座右にして、細描鐵線の動きが裡に藏する滋味無量の書美と醇粹暢達の歌調との渾然たるを愛賞措かざるや年久しく、而して今ここにその釋文を作りて江湖に頒たんとするの所以は、件の複本と雖も既に希覯なること、禪師の萬葉假名草體を盡く讀みとるは必ずしも容易ならざること、是素禪師がかりそめの手控へにはあらめど尙めづらかなる自選歌集の一種として觀るも敢て差障なかるべきこと、従つて世の編纂

物の類とは自ら趣きを異にして禪師直接の微妙なる息吹きの内籠れること、一集甚だ秀逸に富めること、問々推敲の痕をも探り得ること等に因るものとす。即ち、禪師の歌は禪師の書と相俟ちて神氣ひと際爽々たるは今更言ふを須のされども、釋文の文學的價值のみを以てしても、これを一般化するの意義決して尠少ならざること信すればなり。

本集收むるところ長歌三首、反歌一首、旋頭歌六首、準旋頭歌一首、短歌五十首、外に禪師が次弟由之の短歌一首を交へたり。而して、集中の長歌に國上山五合庵に移り住まひて春秋十とせを過ししよしあるは禪師六十歳に近き頃の述懐と覺しく、旋頭歌に山蔭の眞木の板屋とあるを國上山麓乙子祠畔の草庵と見ればこは五十九歳以後の詠出なるべく、依てこの稿本の成りし時期も略々察するに難からざらんか。

凡例

- 一、ここに余が筆寫草稿のままに印刷せしは、組版複雑にして誤植を生ぜんことを憂へたればなり。他意あるにあらず。
- 一、本文は、素よりひたすら稿本あるがままの姿の再現をこそ期したれ。但し便宜上、をどり字を廢め、濁點を施せり。
- 一、明白なる誤字、脱字、贅字は、本文中に「」を挿みて處理せり。輕々しく誤字、脱字を斷じ難き場合は一々註せり。
- 一、假名遣ひの異なるものは、右側に（ ）を以てその正しき文字を示せり。
- 一、左側に漢字を宛てまた若干の註解を加へたるは、本文をして何びとの眼にも親しからしめんがためのみ。識者、しばらくその煩しさを默許されよ。
- 一、稿本に抹消されたる部分或は文字につきては、一たびこれを寫して後左側に――を引き置けり。左側に――を帯びて右側に文字あるは、改められたる句なり。左側に――を帯びずして右側に文字あるは、二案擇一の決せられざる形なり。

あふみぢをすぎて

ふるさとへゆくひとあらばことづてむけふあ
近江路 過
 ふみぢをわれこゑにきと
近江路 我 越

あこらうておとこるにて天神の森にやどり

ぬたよふけがたあらしのいとさむふふき
夜更 方 氣 最 寒 吹

たりければ

やまあらしよいたくなふきそちはやくるころ
おろ 痛 吹 (共ニ枕詞)

ニもかたしきたびねせしよは

片敷 旅 夜

つぎのひはからつてふところにいたりぬ

次 日 唐津 肥前 所 至

こよひもやどのなければ

今宵 宿 所

おもひきやみちのしばくさうちしきてこよひ

思 道 芝 草 敷 今宵

もおなじかりねせむとは

同 假 寝

たかののみてらにやどりて

高野 寺 宿

つ「ま」のくにのたかののおくのふるてらに

津 紀 國 高野 奥 古 寺

すぎのしづくをききあかいつつ

杉 中 聴 明

くろさかやまのふもとにやどりて

黒坂 山 麓 宿

あしひきのくろさかやまのこのまよりりく

阿 詞 黒坂 山 木 間 溪

るつきのかげのさやけさ

月 光 清

いはむろをすきて

岩 越 後 西 浦 原 郡 寺 通

いはむろのたなかのまつをけふみればしぐれ

岩 室 田 中 松 今日 見 附 雨

三「の脱」あめにぬれつつたてり

雨 濡 立

くがみにてよめる

因上 越前西浦寺あり

きてみればわがふるさとにはあれにけりにはも

まがき「も脱」おちばのみして

海葉

いにしへをおもへばゆめかうつつかもよるは

住昔

思

夢

現

衣

時ぐれのあめをききつつ

時

あしひきのやまべにすのばすべをなみしきみ

枕

詞

山

邊

位

新

魚

橋

つみつつこのひくらしつ

橋

此

日暮

もあかのひとつまつのき

飽

松

木

やまかげのありそのなみのたちかへりみれど

山

蔭

荒

波

返

見

たちておてみれどもあかのひとつまつはや

立

居

見

飽

松

はいゆきもとふゆふべにはそこにかでたち

行

行

非

柳

其

處

立

へぬらむちはやふるかみさびたてりあしたに

経

枕

詞

律

立

朝

くがみのおほこののまへのひとつまついくよ

因上

因上山 藤原寺あり

殿

前

松

後

世

あしひきのくがみのやまにいへぬしていゆき

枕

詞

因上

山

新

長

行

因上山 西浦寺あり

かへらひやまみればやまもみかほしたとみれ

ばさとしゆたけいはるべにははたさきををり

あきさればもみぢをたをりひさかたのつきに

かざしてあらたまのとしのとせはすぎにけ

らしも

しづがやのかきぬにはるのたちよりわかた

つまむとしめぬひはたし

返

山見

山見

欲里見

里

豊

春邊

花咲

桃

秋

紅

葉

手折

(枕)

(詞)

月

賢

(枕)

前年

十年

過

賢

家垣

根

春

立

若菜

摘

標

日

魚

わかたつむしづがやどたのたのあずらちきり

このそののやなぎのもとにまろぬしてあそぶ

はるひはたのしきををつめ

うめのはなをりてかざしてそのかみかりに

しことをいぬびつるかも

かすみたつながきはるひにこどもらとてまり

若菜

賢

門田

田

睡歌音力

一本ちどり

鳴

春

成

八鶴鶴、方言
カトモイリ

此

園

柳

下

園

居

庭

春

日

樂

萬葉集二卷六六をへのナレド他ニモをつめト書ケル例アリ
ツラ音振トモ終ナシ難シをハハカトモ解セラル
十集樂

梅

花

折

賢

(枕)

詞

事

他

十脱ニテ後ニ補ヒワリ

霞

三

承

春日

子供

等

手

纏

つきつづこのひくらしつ

突此日暮

このさとにてまりつきつづことどもらとあそぶ

此里手継突子供等遊

はるひはくれずともよし

春日暮所

このみやのもりのこしたにことどもらとあそぶ

此宮森木下子供等遊

はるひになりにつけらしも

春日所

ひさかたのあまぎるゆきとみるまでにふるは

(枕) 枕 天 霧 雪 見

さくらのはたにありける

櫻 花 一本に下ニヤアリ

あをやまのこぬれたあきほととぎすなくこ

青山 山 木 桐 立 潜 時 鳥 鳴 聲

ゑきけばはるはすぎけり

聴 春 過

ほととぎすながなくこゑをなつかしみこのひ

時 鳥 泣 鳴 聲 標 此 日

くらしつそのやまのべに

暮 共 山 邊

よのなかをうしともへばかほととぎすこのま

世 中 憂 思 時 鳥 木 間 此 日

かくれてのみなきわたるなり

句ヲ改メテ後ニ挿入セリ 隠 鳴 渡

九 まくらばにひどもかよはぬやまざ「と脱」はこ

編 通 山 里

わくらばはヨ詠レルナラン

十 ずへ(急)にせみのこゑばかりして

つきよよみかどたのたぬ下でてみればとを(目)や
月夜好 門日 田屋 出 見 連山

まもとにきりたちわたる
下 霧 立 巻

わがまちあきははきニ字脱テテ後ニ補ヒアリきぬらしこのゆふづくさむ
我 待 秋 末 此 夕 草 叢

らごとむし毎 女 疾のこゑする聲

ひさかたのた「(枕)を脱」ばたつめはいまもかもあ
(枕) 詞 織 女 今 天

まのかはらにいでたたすらり
之川原 出 立

わたしもりはやふなでせよぬばたまのよきき
渡 守 早 舟 出 鳥 (枕) 詞 夜 露

「リカ」はたちぬかけのせごと
立 川 瀬 毎

ひさかたのあまのかはらのわたしもりかはな
(枕) 詞 天 之 川 原 渡 守 川 波

みたがしこころしてこせ
高 越

ぬばたまのよはふけぬらしむしのぬもわがこ
(枕) 手 脱ニテ後ニ補ヒアリ 詞 夜 更 疾 言 我

あもでもうたてつゆけき
衣 手 精 露 け 脱ニテ後ニ補ヒアリ

十一 いまよりはつぎてよさむにたりぬらしつづれ
今 次 夜 寒 成 儘 襟

させてふむしのこゑする

刺 古 聲

いそのかみふるるかはのへのはぎのはなこよ
(枕 詞) 古 川 違 萩 花 今 宵

ひのあめにちりすぎぬらむ
雨 草 過 移

さびしさにくさのいほりをでてみればいなば
淋 草 産 出 見 稻 葉

おしなみあきかせぞゆく
押 靡 秋 風 吹

わがやどをたづねてきませあしひきのやまの
我 宿 訪 來 枕 詞 山

もみぢをたをりがてらに
紅 葉 手 折 暮

あきやまをわがこえければたまほこのみちも
秋 山 我 越 來 枕 詞 道

てるまでもみぢしにけり
映 紅 葉 高

このごろのねざめにきけばたかさごのおのへ
此 頃 寢 覺 睡 枕 詞 堀 上

にひびくさをしかのこゑ
響 壯 疾 聲

やまざとはうらさびしく「ぞ脱」たりにけるき
山 里 心 淋 成 枕 詞 木

きのこがへのちりゆくみれば
木 木 末 散 行 見

十三
もみぢははちりはするともたにがはにかげだ
紅 葉 葉 散 為 漢 川 影

十四 へのこせあきのかた「み脱」に

よをさむみかどたのくろに(る)いるかも「の脱」い

ねかてにするころにぞあき「二字聲字」ありける

わがやどはこいのくらやまふゆごもりゆきき

のひとのあとかたもなし

はるのよ由之をゆめにみてさめて

いづくよりよるのゆめぢをたどりこいみやま

はいまだゆきのふかきに

まさらぎのさふかばかりにいひこふとて

まきやまてふところて後ニ論ヒアリにゆきて有則がもと

のいゑをたづぬればいまはのらとたりぬ

ひときのうめのちりかかりたるをみてい

にへおもひいでてよめる

十五 ぞこの「カ」かみはさけにうけつるうのの「事

十六 字は左つちにおちけりいたづらにして

ふるさどには春をみて

故里 花 後三島印

左にごともうつりのみゆくよのなかに花は

むかしのはるにかけらず

昔 春 麦

あひりいひとのみまかりてまたのはる

ものゆくみちにてすぎてみればすむひ

とはちくてはなはにはにちりみたりてあ

りけれ

おもはへずまたこのいほにきにけらしありし

むかしのころからはひに

左一がみまかりしころ

このさどにゆききのひとはさはにあればもさ

すたけのきみしまさねばさびしかりけり

十七 またのはるわかたつむとて

以下四行後二重出セル故左側ノ宛字略ス

あづさゆみはるのにいでてわかたつめどもさ

すたけ「の脱」きみしまさねばさびしかりけり

いほにきてかへるひとをみおくとて

またのはるわかたつむとて

あづさゆみはるのにいでてわかたつめどもさ

すたけのきみしまさねばさびしかりけり

いほにきてかへるひとをみおくとて

やまかざのまきのいたやにあのもふりこねさ

すたけのきみがしばしとたちどまるべく

ふるさとのひとのやまぶきのはなみに

むといひおこせたりけりさかりにはまて

どもこずちりがたになりて

やまぶきのはなのさかりはすぎにけりふるさ

とびと「を脱」まつとせしまに

あづさゆみはるのにいでてわかたつめどもさ

すたけ「の脱」きみしまさねばさびしかりけり

いほにきてかへるひとをみおくとて

またのはるわかたつむとて

あづさゆみはるのにいでてわかたつめどもさ

すたけのきみしまさねばさびしかりけり

いほにきてかへるひとをみおくとて

やまかざのまきのいたやにあのもふりこねさ

すたけのきみがしばしとたちどまるべく

ふるさとのひとのやまぶきのはなみに

むといひおこせたりけりさかりにはまて

どもこずちりがたになりて

やまぶきのはなのさかりはすぎにけりふるさ

とびと「を脱」まつとせしまに

さつきのころ由之が^{禪師の茶を}かたよりいひおこせ

たるうた

わがやどののきのしやうぶを^{宿軒}やえふかばうき^{八重葺}

よのさがを^世けだしよきむかも^蓋

かへり

やえふかば^{八重葺}またもひまを^又やどのめもせむみす^身

ぎが^川けへもちて^持すてませ^捨

寄

寄

おさな^(を)きときいとむつ^幼かしくちぎり^時たる^最

ひと^人ありけりいな^(を)か^田を^金すみわ^住びてあづま^他

のかた^方「へ脱^方」いに^去がけり^此な^方たよりも

かな^彼たよりもひさしく^又を^(お)ともせ^音でありし

が^此このたび^度み^致まかりぬ^聞とききて

かく^此あらむ「と脱」かねて^縁しり^知せば^(枕)たま^詞まぼ^の

先一 みちゆ^道き^行び^人とに^言ことづ^傳てまし^を

このくれのうらがななききにくさまくらたびの

いほりにけてしきみはや

よみて由之につかはす

くさのいほにたちてもぬてもすべのなまきの

ごろきみがみるぬおもへば

かみなづきのころたびびとのみのひとつ

きたるかかどにたちてもものこひければ

此 暮 此 枕 詞 此

庵 果 君

詠 神無月 此

草 庵 此 術 此

頃 君 見 思

神無月 頃 旅 人 業

着 門 立 物 毛

るぎぬきてとらしめすさてそのよあらし

のいとさむくふきたりければ

たがさとにたびぬしつらむぬばたまのよは

脱しあらしのうたてさむきに

とりのはてにかがみをみて

しらゆきをよそにのみみてすぐせしがまさ

廿三 わがみにつれりぬるかも

我 身 積

白 雪 外 見 過

年 果 鏡 見

脱 氣 精 寒

誰 里 絳 寝 (枕) 朝 夜 半

景 寒 吹

着 脱 取 柄 共 衣 嵐

しらゆきはふればかつけぬしかはあれどかし

らにふればきえずぞありける

としのはてによみてありのりにおくる

のつみのみでらのそののうののきをねこじに

せむとあづさゆみはるのいゆふべにいはがね

のこごしきみちをふみわけてのきばにたてば

ひとはみでぬす脱びとなりとかねをうちつ

白雲

降

且

然

有

頭

降

消

有

年

果

詠

有

別

贈

野積

寺

園

梅

木

根

根

越後湯原郡ナリ

(枕)

(詞)

其

妻

根

嶮

道

踏

合

并

端

立

人

見

盜

人

鐘

打

かものつぎごろは

いはむろ

岩空 越後湯原郡ナリ

づみをならしあしひきのやまとよもしてつど

ひけりしかしよりしてみかびとにはなぬすび

ととよばはえしきみにはあれどいついかもと

しもへぬればあしのやのまろやがもとによも

すがらやつかのひげをひわりつつおはすらむ

此

月

頃

岩空 越後湯原郡ナリ

鼓

鳴

(枕)

(詞)

山

警

木

点

人

若

道

時

若

有

何

時

年

經

蓋

屋

丸

屋

下

夜

八

束

舞

持

古

いはむろののなかになたてるひとつまつ木のきけ
岩 立 野 中 立 松 木 針
ふみればしぐれのちめにぬれつつたてり
日見 時 雨 雨 満 立

やまたづ(枕詞ヲ題トスリ)

やまたづのむかののをかにさをしかたてりか
(枕) 詞 向 鹿 立 神

みなづ「き脱」しぐれのちめにぬれつつたてり
魚 月 時 雨 雨 満 立

あきのの秋

あきのの「の脱」ちぐさおしなみゆくはたがこ
秋 野 千 草 押 鹿 行 誰 子

ぞしらつゆにあかもものすそのぬれまくもおし(巻)
白 露 赤 裳 裾 濡 惜

しらゆき白

しらゆきはふればいく(心)えもつもれつもらねば
白 雪 降 幾 重 積 松

とてたまほこのみちふみわけてきみがこなく
(枕) 詞 道 踏 分 君 来

に

はちのこ鉢

鉢 子 鉢 用 鉢 鉢 子

はちのこをわがわするれどもとるひとけなし
鉢 子 成 成 盛 人 無

- 1 JUN 1943

光八

とるひとはなしはちの子あはれ
子

昭和二十一年五月二十日印刷
昭和二十一年五月三十日發行

並四・五〇〇
特二〇〇〇

著者	吉良
釋文者	野秀寬
發行者	佐藤八平
印刷者	東京都橋區銀座西八ノ四
印刷所	東京都麴町區飯田町二ノ二〇
發行所	東京都麴町區飯田町二ノ二〇
電話	東京都橋區銀座西八ノ四
振替	東京一ノ二三九五番



